2016

日中大学フェア＆フォーラム in イノベーション・ジャパン 2016 開催報告書

国立研究開発法人　科学技術振興機構
中国総合研究交流センター

CONTENTS

日中大学フェア＆フォーラム in イノベーション･ジャパン 2016
沿革・・1
趣旨・・1
開催概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1. 日中大学フェア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2. 中国側出展機関技術説明会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

3. 成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

4. 出展者アンケート集計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

日中大学フェア＆フォーラム
in イノベーション・ジャパン 2016

【沿革】

国立研究開発法人科学技術振興機構中国総合研究交流センターは、日本と中国の大学交流の場を提供し、日中のハイレベルの専門家による討議を行うことにより、次世代のイノベーションを担う人材を育成するため、2010 年より毎年、「日中大学フェア＆フォーラム」を開催してきた。

本フォーラムのミッションは大学間の交流、日中間の産学官連携の強化、そして留学の促進である。これまでに日中双方から延べ 300 校以上の大学が参加、いまや日中間の最大の学術交流イベントとなっている。

ところで「日中大学フェア＆フォーラム」は第 1 回、第 2 回を東京で開催、第 3 回目を 2012 年秋に予定していたところ、領有権問題などで無期延期となった。このため 2013 年 3 月、中国教育部傘下の留学服務中心が主宰する「中国国際教育巡回展」の場を借りる形で、初めて日本の大学 42 校を率いて、中国・北京で開催した。中国での開催は「日中大学フェア＆フォーラム in CHINA」として、2016 年 5 月までに 4 回開催された。

一方、2014 年より中国の大学が参加する形で、「イノベーション・ジャパン」と同時開催となった。本年の「日中大学フェア＆フォーラム in イノベーション・ジャパン 2016」は同時開催 3 回目となり、中国の大学・研究機関が独自の技術や成果を携えて、ブースを構えて展示すると同時に、日本企業向けに説明会などを開催し、中国の大学の力量と科学技術の水準の高さをアピールした。

【趣旨】

21 世紀アジアのイノベーション創出には日中の対等な協力が不可欠である。今年の「日中大学フェア&フォーラム」には、中国からトップクラスの 32 大学が、独自のアイデア、技術、製品を携えて参加、日本の大学や企業との連携に熱い視線を注いでいる。

フェアでは技術や製品の展示だけでなく、中国が日本に求める技術についてもプレゼンが行われる。「日中大学フェア&フォーラム」は単なる展示会を超えて、今やイノベーション創出に向けた日中間で最大のマッチング・プラットフォームである。中国では今年から「第 13 次 5 ヶ年計画」がスタート、さらには「インターネットプラス」「中国製造 2025」、それに「現代のシルクロード構想」など、イノベーションを加速するプロジェクトが続々とスタートしている。

「日中大学フェア&フォーラム」が今後の日中間の相互技術移転や国際産学連携の促進に貢献することを強く期待する。

【開催概要】

1）日中大学フェア（「イノベーション・ジャパン 2016　大学見本市」と同時開催）

日時　　平成 28 年 8 月 25 日（木）　9：30－17：30 及び 8 月 26 日（金）　10：00－17：00

会場　　東京ビッグサイト（東京国際展示場）西展示棟　西 2 ホール　中国側ブース展示エリア
　　〒135-0063 東京都江東区有明３丁目 3-11-1

＜出展大学＞

アモイ大学、濰坊工商職業学院、華東交通大学、広東工業大学、吉林大　学、湖南大学、山東大学、四川大学、上海交通大学、上海大学、清華大学、浙江大学、蘇州大学、蘇州科技大学、遵義医学院（医学与科技学院）、大連理工大学、中国科学院（蘇州産業技術育成中心）、中国科学技術大学、中山大学、同済大学、東南大学、南開大学、南京工程学院、南通大学、ハルビン工程大学、武漢理工大学、福州大学、北京大学、北京交通大学、北京理工大学、北京連合大学、香港大学、計 32 校・機関

＜出展内容＞

各大学・機関の産学連携の仕組み、情報通信、環境保全・浄化、ライフサイエンス、低炭素・エネルギー、医療、マテリアル・リサイクル、装置・デバイス、シニアライフ、ナノテクノロジー、防災などの分野に関する技術

２）中国側出展機関技術・需要説明会及び日中科学技術マッチング

日時　　平成 28 年 8 月 25 日（木）　10：30－15：30　　（計 11 大学・企業）

会場　　東京ビッグサイト（東京国際展示場）西展示棟　西 2 ホール中国側ブース展示エリア
　　セミナーコーナー

内容　　①　中国出展者による研究成果の発表　②　中国側が日本に求める技術の説明

３）日中交流会

日時　　平成 28 年 8 月 25 日（木）　18：30-20：0 0

会場　　日本科学未来館 7 階　展望ラウンジ
　　〒135-0064 東京都江東区青海２丁目２－３－６

＜プログラム＞

18：30-18：35	主催者挨拶	広瀬　研吉	科学技術振興機構 中国総合研究交流センター副センター長
18：35-18：40	来賓挨拶	阮　湘平	中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官
18：40-18：45	出展者代表挨拶	李　建軍	山東大学常務副書記
18：45-18：50	乾杯音頭	広瀬　研吉	科学技術振興機構 中国総合研究交流センター副センター長
	歓談		
19：50-20：00	中締め	沖村　憲樹	科学技術振興機構　特別顧問

1.　日中大学フェア

公募型オープンイノベーションで意見交換

「知の創造～新たな結合による価値の創出～」を掲げて、8 月 25、26 日、東京ビックサイトで開催された「イノベーション・ジャパン 2016」の日中大学フェアでは、中国から 32 大学・機関がブースで出展し、日本企業や大学とのビジネス・研究マッチングで積極的な交流を展開した。

写真１　中国の大学の出展ブースで来訪者を歓迎するスタッフら

武田薬品工業医薬研究本部のアライアンスマネージャーの村西廣哉さんと、課長代理の中西和子さんは、中国の大学ブースを回りながら、同社が進めている「公募型オープンイノベーション」の説明などを行った。

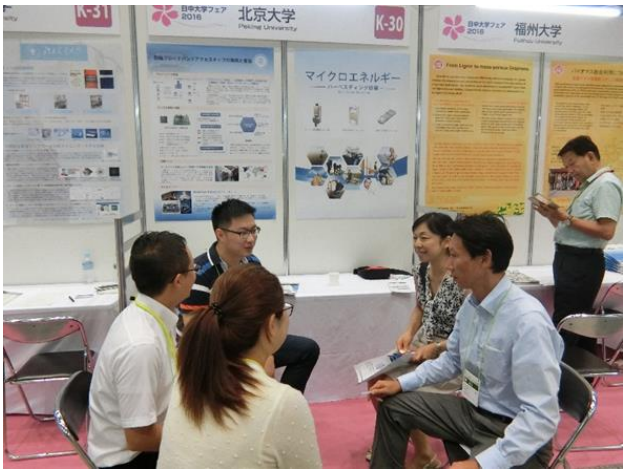


写真２　公募型オープンイノベーションについて説明する村西マネージャー（右手前）と中西課長代理（右から 2 人目）。意見交換する葛助理（一番奥）

スマホ画像を立体的に見る装置

中国ブースの展示内容の中でもひときわ参加者の興味をひいたのが、浙江大学の実演する３Ｄバーチャル・リアリティーヘルメットである。これは同大学常州工業技術研究院のチームが開発したもので、携帯端末向けの重さ 290 グラムの装置である。
写真で見るように、小型装置にスマホなどをセットするだけで 360 度のパノラマ画像を見ることができる。眼鏡をつけたままでも使用できるしゲームでも楽しむことができる。

写真３　この通り。手放しで立体画像を見ながら楽しむことができる。

ベンチャー企業創業者らがビジネスシーズを検索

清華大学サイエンスパークに所属しているベンチャー企業創業者、ベンチャーキャピタル社の社長らが、日本の大学や企業の成果の中で、自分たちで実用化できる技術を検索していた。

清華大学出身でベンチャー企業を立ち上げた李勃社長は、大阪工業大学工学部ロボット工学科の小林裕之教授の「二次元コードを用いた自立ロボットのナビゲーション」に興味を持った。

このナビゲーションは、ＱＲコードの持っている任意の情報をエンコードできる性質を利用して、自己位置を推定する情報を得るだけでなく、誘導経路、進入禁止エリア指定などを持たせることが可能だという。

たとえば、人間を誘導するためのスマホアプリなどへの応用も可能だとしている。

李社長は、これをロボット掃除機にセットしたりデパートの案内などにも応用できるとしており、将

来は無人自動車と道路標識などをリンクさせた補助的なナビゲーションに発展できるのではないかと考えたという。

ブースを訪れた李社長は、こうした自身のアイデアや考えについて開発者の小林教授と意見を交換し、今後の応用利用について話し合った。

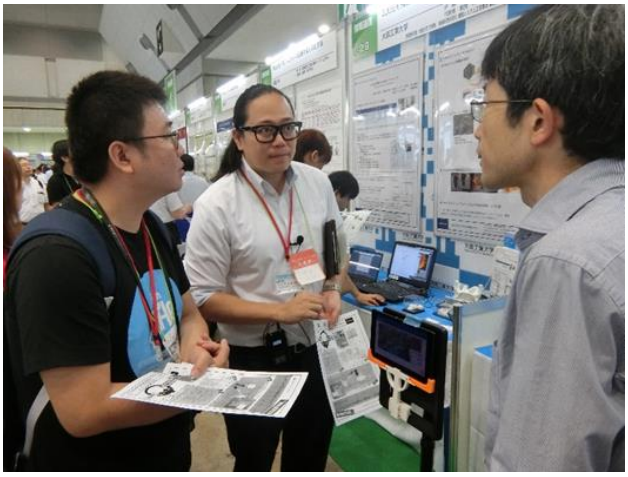


写真４　小林教授（右端）と意見交換する李社長（左端）

炭素繊維を材料にした３Ｄプリンターでの製品製造

炭素繊維は軽くて丈夫だが、炭素繊維製品を 3D プリターで製造する新しい手法を開発したのは呉工業高等専門学校の山脇正雄教授である。この技術に眼を付けたのも清華大学サイエンスパークのベンチャー企業グループだった。

写真５　炭素繊維の 3D プリンター成形技術について説明する山脇教授（右側）

炭素繊維を3Dプリンターで応用する技術はアメリカのベンチャー企業がすでに成功しているが、山脇教授はこれを発展させてより形状を柔軟に造形できる方法を発明した。「積層膜としてはまだ強度でも改善するべき点はあるが、基本的な強化繊維による強度を確保する方向は見えてきた」と語っており、清華大学グループもこの点を評価し、今後の実用化などについて模索するという。

李社長らの話によると、中国ではイノベーション・ジャパンのように企業、大学、研究機関が一堂に集まってブースを構え、技術成果を展示してマッチングするような展示会はないという。

「中国では、企業の研究開発力が小さいので大学発の技術を欲しがっている。日本の大学が中国でこのようなブースを構えて展示すれば、多くの中国企業が集まってくるだろう」と語っていた。

写真６　清華大学サイエンスパークから来た 6 人のグループが各ブースの発表内容などについて話し合った。

2. 中国側出展機関技術説明会

中国側の出展内容は前年と同様、情報通信、環境、ライフサイエンス、装置・デバイスなど広い分野にわたった。以下、8 月 25 日に行われた中国側の技術説明会の様子を紹介する。

1.「コールタールとピッチを利用したガス吸着材料について」アモイ大学教授　李磊

化石燃料の使用に伴う温室効果へのソリューションの１つとして高架橋微孔性ポリマーを開発した。コールタールとアスファルトの中にある芳香族化合物を利用してトリクロロメタンと架橋結合してフリーデル・クラフツ反応を起こし製造する。この新開発の微孔性材料は表面積が大きいなどの特徴があって吸着性は高く、コールタールなど豊富に存在する安価な原料を使うことからコストパフォーマンスが良い。さらに製造方法がシンプルなことから、未来の CO2 回収と H2 貯留および有機ガス吸着に応用できる材料である。有機ガスの吸着は他の材料を 2～3 倍上回っている。今後もより低コストの反応性モノマーを模索するとともに、他の反応方法による高架橋微孔性ポリマーの製造を模索する。

2.「軽量化複合材料の構造最適化設計及び製造技術の開発について」吉林大学副教授　韓奇鋼

繊維複合材料自動車懸架バネをはじめとする軽量複合材料の利点と応用例について、すでに米国１、中国 14 の発明特許を取得済み。この成果を基に企業設立の動きが進んでいる

金属合金を代替する複合材料は、吉林大のチームでは主に安全性の高い玄武岩繊維、炭素繊維、ガラス繊維増強複合材料について、部品の製造技術を系統的に研究している。2 種類以上の性質の異なる材料を用い、物理的または化学的な方法を通じて形成される複合材料は新たな性能を備えた材料であり、軽量や高強度、加工・成形の容易さ、耐腐食性や高い安定性などの長所を持つ。

すでに航空分野でエアバス、高速鉄道、自動車に使用されており、この３つを重点分野としている。自動車、高速鉄道、石油業界のほかトイレ・バス（浴槽）などに応用例がある。

3.「ポータブル高エネルギーレーザー誘起ブレークダウン分光分析装置について」
四川大学空天科学行程学院研究員　王旭

レーザー誘起ブレークダウン分光原理（Laser Induced Breakdown Spectroscopy＝LIBS）に基づいて試作された一人での手持ち操作が可能な「手持ち式分析機器」を実物展示した。この製品はレーザーエネルギー出力が 1 パルス 100mJ で、地質サンプルの元素組成を識別できる。電源はリチウム電池で、一度の充電で連続 2.5 時間、600 発のパルスレーザー（出力 100mJ）を照射可能。迅速に識別・分類・定性・定量分析ができる。重量 2.95kg（電池除く）と軽量・コンパクトで操作しやすい。

目立たない損傷が残る程度の微破壊試料の表面を分析機器の計測面に接触させるだけで、試料に含まれる元素名と含有率がわずか数秒で表示される。現地分析に使用できる。鉱物資源の探索だけでなく、食物中に含まれる毒性物質のチェックなどにも応用可能な機器として近々、製品化を予定している。また「手持ち」より大型の「携帯式分光計」があるが、こちらのスペックは総重量 8kg（電池含む）。サイズ 300mm×170mm×250mm。

4.「蘇州自動車研究院について」
清華大学蘇州汽車研究院（呉江）職員　陳翠翠

清華大学蘇州自動車研究院は清華大学より派生した独立事業法人として 2011 年 7 月に設立された総合型の産業研究所である。自動車の応用技術の研究開発、その成果の活用、ハイテク企業の支援・育成を行っている。

研究院は産業界のニーズを考慮し、清華大学の技術面・人材面での優位性に基礎を置く。ハイテク技

術が次々と誕生しファイナンスが活発に行われ、レベルの高い人材が集結する「中国自動車産業の革新センター」となっている。

地方政府も支援に力を入れ経費、研究施設・開発のための用地提供、実験室などの研究開発施設の建設・整備に協力している。インキュベーターと企業等は優遇策として、蘇州市の優れた人材を対象とした奨励策や、市税面の優遇を受ける。大学の自動車学部などもバックアップしており、自動車関係の研究開発の成果を実用化する唯一のプラットフォームとなっている。大学からは副学長が管理委員会の主任に就任、地方政府が副主任を派遣している。

5.「ビル・エネルギーシステムのインターネット対応による省エネ主要技術について」
大連理工大学建築エネルギー研究所副教授　趙天怡

「ビル・エネルギーシステムのインターネット」（Internet of Building Energy System, iBES）は、従来型の建築省エネモニタリング技術における問題解決のため、モノのインターネット（IoT）技術の概念と基準の優位性を総合的に導入し、広範な分野の問題を解決した。具体的には、公共建築のエネルギー消費モニタリング配置の理論的根拠やエネルギー消費データの精度保障、現場のネットワーク構築、マルチネットワークによるデータ伝送の質の保障などがある。

iBES システムが提供するデータに基づき、研究チームはさらに、公共建築の全ライフサイクルにおける性能の診断・最適化制御方法（Energy Performance Diagnosis and Optimal Control, i-Epdoc）を提出。i-Epdoc と iBES モデル建築を有機的に結合し、建築の全ライフサイクルにおいて省エネ運営の参考となるエネルギー効率指標を提供する。現在、iBES+ i-Epdoc の中国におけるモデル建築は 338 棟、総面積 618 万平方メートルに達する。

6.「産業用制御ネットワークフォールトトレラントシステムの開発について」大連理工大学講師　趙亮

開発された次世代工業制御ネットワーク冗長化フォールトトレランスシステム（Fault tolerant system）は、比較的低いコストで設備同期・故障検出・自己修復・故障報告・設備ホットスワップ(Hot swap＝活線挿抜）などの機能を実現した。現在の冗長リング方式では解決できない設備や制御ネットワークの故障によって起きる問題を解決し、システム全体の故障後も通常通りの安定した稼動を保てる。同時に、すべての故障発生の詳細情報を記録し、メンテナンスと修復の根拠を与える。

システムにはマスターコントローラー冗長化システム、スレーブ設備冗長化システム、故障ダイアリーシステム、ホストコンピューターモニタリングインターフェイスの 4 部門が含まれる。当システムは 2014 年に「中国発明特許優秀賞」を獲得した。この特許を核心として、フィールドバスやプログラマブルコントローラーなどの自動化制御システム特許プールを形成しており、産業化を実現した。

7.「数値シミュレーションソフトウェア（SiPESC）について」
大連理工大学　工業設備構造分析国家重点実験室運送工学・力学学部工業力学科博士　李超

数値シミュレーションソフトウェア産業化プロジェクト（SiPESC）は、計算力学の科学的研究と工学的応用向け公共サービスソフトウェアプラットフォーム。開放性や統合性の高さ、大規模計算向きという特長を有する。これまでに統合システム・構造分析・最適化計算・構造位相最適化・スクリプト言語など多くのサブシステムを構築し、拡張マルチスケール有限要素、多重マルチレベル動力学サブ構造などの独特のアルゴリズムを発展させ、多学科/多分野/マルチアルゴリズム/マルチモデル/多技術の研究・エンジニアリング・大規模計算などの統合応用に向け、数値シミュレーションプラットフォームと技術で良好な土台を築いた。

大連国際貿易ビルの構造分析、宇宙船の機体・設備間直接部品の構造分析・最適化、重加重列車の二重コンテナ車体構造の最適化など運輸、航空・宇宙、建築など広い範囲で多くの使用例がある。

8.「大判 3D レーザープリンター設備及びその利用について」大連理工大学　大連理工大学材料化学工程学院博士　趙枢明

開発中の超大型 3D プリンター装置（製造加工サイズ 2000mm×2000mm×1000mm）は、映像モニタリングや自動アラーム、プロセス管理などの機能を備える。加工過程は自動管理方式で、人間の介入は不要。コ

ーテッドサンドやコーテッドメタルパウダー、コーテッドセラミックパウダーなどの粉末材料の加工が可能で、砂型鋳造・特殊鋳造の砂型などのデジタル製造に用いることができる。

研究チームは2002年、従来のLOM法とSLS法を土台として、新型3D印刷法を開発。実験室ではすでに第5世代のプロトタイプが自主開発されている。形状が複雑な部品や鋳型の製造需要に注目し、加工効率や精度、信頼性、コストなどの要求を満たす自前のノウハウ開発をはかり、自らの知的財産権に基づく3Dプリントと応用の技術体系を形成し、装置の大型化・効率化、工業化で必要とされる一連のコアテクノロジーの問題をクリアした。

SLS法と同様に高分子やセラミック、金属などの多様な材料による印刷が可能で、LOM法の高速加工の優位性も同時に保っている。

9.「ドローンに基づく農業データ分析サービスソリューションについて」雲翔科技サービス有限公司 AirWing Technologies Inc.　CEO 杜金

雲翔科技サービス有限公司は2015年5月に合肥市高新区に設立、ハイテク型核心企業として中国科学技術大学先進技術研究院確信産業パークに入居した。当ソリューションはドローンに搭載した各種光学イメージング設備を利用して、遠隔センシング技術により農地および農作物関連データを収集し、自主開発したクラウドプラットフォームにアップロードし、人工知能やデータマイニング等の技術プラットフォームを利用して収集データ・画像を総合的に処理・分析し、地表農作物の生育情報を把握する。

さらに、獲得した情報を利用して農薬噴霧、化学肥料使用の合理化、灌漑用水の効果的な節約を指導する。自然災害の際には、プラットフォーム・システムにおいて適時に農作物の被害状況を把握し、損失面積及び損害レベルを正確に算出・評価する。これにより、精密農業・農業保険支払・農業監督管理等の細分化された領域に対して正確な情報の提供を可能としビッグデータの分析プラットフォームおよび解決ソリューションを提供する。協力モデルとして１）データサービス、２）センサー＋データサービス、３）総合ソリューションの３パターンを想定している。

10．「無筋建築に利用可能な超高延性セメント系複合材料UHDCCについて」　同済大学土木工程学院構造工程・防災研究所　副教授　余江滔、俞可権

繊維強化コンクリートの多くは鉱物繊維、金属繊維、ポリマー繊維を強化材料としている。中でも、ポリビニルアルコール繊維を混入した Engineered cementitious composites（PVA-ECC）は、その高延性とひずみ硬化性の高さで知られるが、圧縮強度、引張強度、極限引張強度におけるひずみが建築用鉄筋の水準を大きく下回り、無筋構造物の構造材料にはなりえない。これに対し超高延性セメント系複合材料（Ultra-high-ductile cementitious composites、UHDCC）の力学的性質は引張強度５～２０MPa、最高引っ張り変形８％以上、抗圧強度 100 MPa 超。一般的な鉄筋の延性水準すら上回りと無筋建築に応用可能な潜在力がある。UHDCCを採用した無筋梁の抗湾曲性能は普通鉄筋コンクリート梁に匹敵し、さらに良好な延性を示す。無筋建築の初期の成功事例といえる。1）プレキャストコンクリート部材の現場での接合　2）無鉄筋の建築物の3Dプリント　3）橋の路面の連続構造とエキスパンションジョイント　4）建築物においてエネルギーを消費する重要な部位—において幅広い応用が可能。

11.「新型の低周波・広帯域騒音制御（Innovative Broadband Noise Control at Low Frequencies）について」香港大学空気圧工学・音響学実験室 アシスタント・リサーチ・フェロー　張宇敏

切替型電気機械装置つき電気・音響相互作用隔壁（Shunted Electro-Acoustic Diaphragm=SEMD）＝生活のあらゆる場面に存在する低周波の騒音に対して、従来の機器に比べ低周波の吸収がかなり良い。また、騒音吸収のレベルを調整可能なことから、通風時の騒音コントロール、視聴室の残響時間コントロール、航空機エンジン・ガスタービンの熱音響の不安定さ解消向けなどへの応用が考えられる。

低周波・広帯域騒音制御（Innovative Broadband Noise Control at Low Frequencies）＝隙間などに汚れがたまりやすく高湿環境で性能が急激に劣化する従来型の材料に比べ、微細孔パネル（micro-perforated panel＝MPP）吸音構造は、クリーンで熱や腐食に強く、高速気流の衝撃に耐える等

の長所があり、建築音響学などの分野に幅広く応用されている。一般の MPP 吸音構造は、狭い周波数帯域でのみ有効で、広域帯の吸音には孔径が極めて小さくなければならず、製造コストも高かった。新開発の多空洞並列 MPP 吸音構造は、パネル後部の空洞に特殊設計を施すことにより、一般的な孔径の MPP パネルにおける吸音周波数範囲の狭さを解決して帯域を大きく広げ、必要な空洞の深さを従来の MPP 構造より半分にし、加工コストを引き下げることができた。

12.「情報通信サイエンス＆テクノロジーパークのイノベーションと発展について」

星橋騰飛（Ascendas Singbridge） 黄鳳潔

星橋騰飛は「都市の持続可能な発展を牽引し、さらに経済のモデル転換を促進し生活の質を向上させること」を願い、「シンガポールの発展の経験を参考にして、大型都市化プロジェクトの開発に力を注ぐとともに、人々の普段の向上を奨励することのできる全方位的なビジネス環境を創出すること」を使命とする企業集団。1982 年にシンガポールで設立され、92 年に初めて中国に進出。昨年 6 月のグループ内の合併・統廃合を通じて「持続可能な発展」を目指している。

3 つの上場基金と中国や東南アジアなどで建設中のプロジェクトへの投資に利用されるプライベートエクイティ・ファンド１１を運営。アジアの 10 カ国・29 都市において管理する資産総額（AUM）は 216 億シンガポールドル、不動産を主とする関係プロジェクトの総敷地面積は 1600 平方 km 超に及ぶ。グループ内には上場企業が 3 社、世界各地のパートナー企業の中には著名な日系企業も含まれる。

騰飛グループはシンガポールで 120 以上の不動産、1500 社を超える顧客を有し、管理資産総額は 99 億シンガポールドル、管理資産の総面積は 3560 万平方フィートに上る。中国では管理資産総額は 25 億シンガポールドル、管理資産総面積は 1150 万平方フィート、建設中のプロジェクト規模は 1000 万平方フィートを超える。蘇州のサイエンスパーク内にもプロジェクトがある。顧客、当社及び現地経済の３者にとってバランスの取れた持続可能な発展を基礎として、信頼に値するビジネス空間ソリューションプランを提供する長期的なパートナー関係を築きたい。

13.「中国高科集団について」

中国高科集団股份有限公司　副総裁　王洵

中国高科集団（China High-Tech group）は、新たな職業教育に注力する高等教育機関の設立・拡大を進める活動に取り組んでいる。全国人民代表大会副委員長を務めた李鉄映氏が 1992 年に創立し、96 年に上海証券取引所に上場した教育関連企業であり、現在すでに今回出展した遵義学院医学・科技学院をはじめ三つの高等教育機関を運営している。グループは、中国の新しい国家戦略「メードインチャイナ 2025」は、インターネットがもたらした新しい考え方と方法を融合させ、産業モデルの転換を図るのが狙いであると分析。さらに、昨年 12 月の「教育法」改正により、上場企業が教育事業に乗り出す際に法的支援が受けられるようになり、「職業教育の世界において歴史的チャンス」が到来したと判断している。運営中の高等教育機関 3 校に加え、新たな教育事業を発展させ、日本の教育機関とも協力関係を強化したい。

3.成果と課題

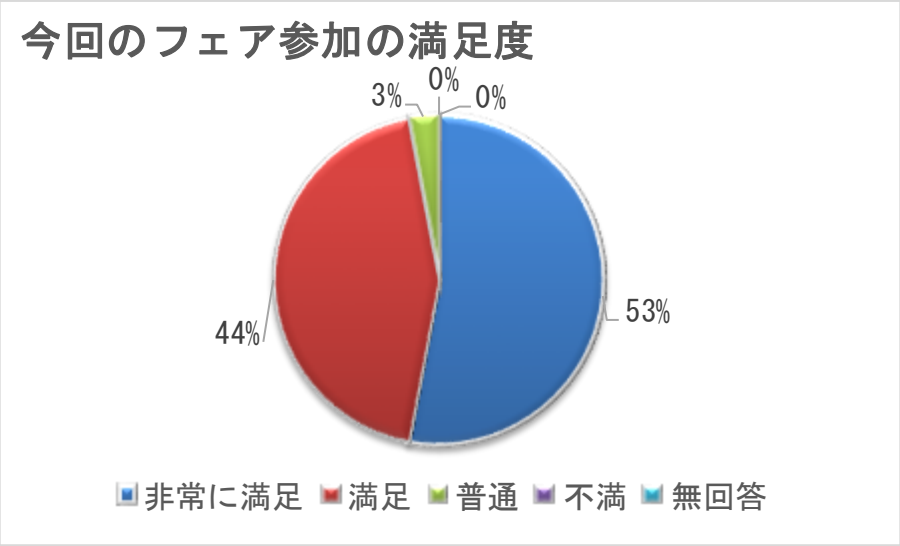
「日中大学フェア＆フォーラム」と「イノベーション・ジャパン」との同時開催は今回で 3 回目となる。1 回目、2 回目の反省点を踏まえ、中国側出展者との緊密な連絡を取りながら、「イノベーション・ジャパン」の開催趣旨に合わせて、展示が行われた。出展者は資料のみならず、実物を展示して、多くの来場者を惹きつけた。

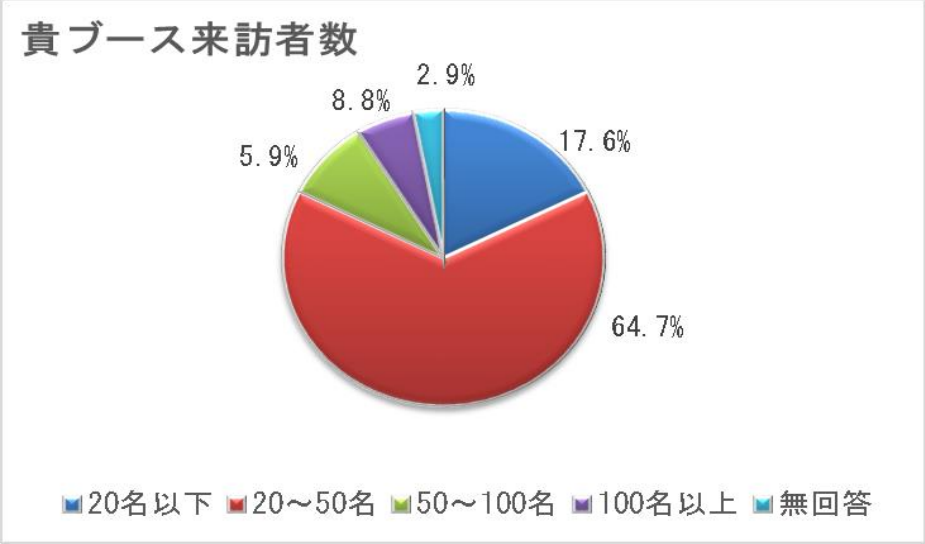
とくに浙江大学のブースには、スマットフォン向けの重さ 290 グラムの３D バーチャル･リアリティーヘルメットの展示があり、注目を集めた。大手日本企業を含む 6 社と、将来の技術協力に向けて協議しているという。

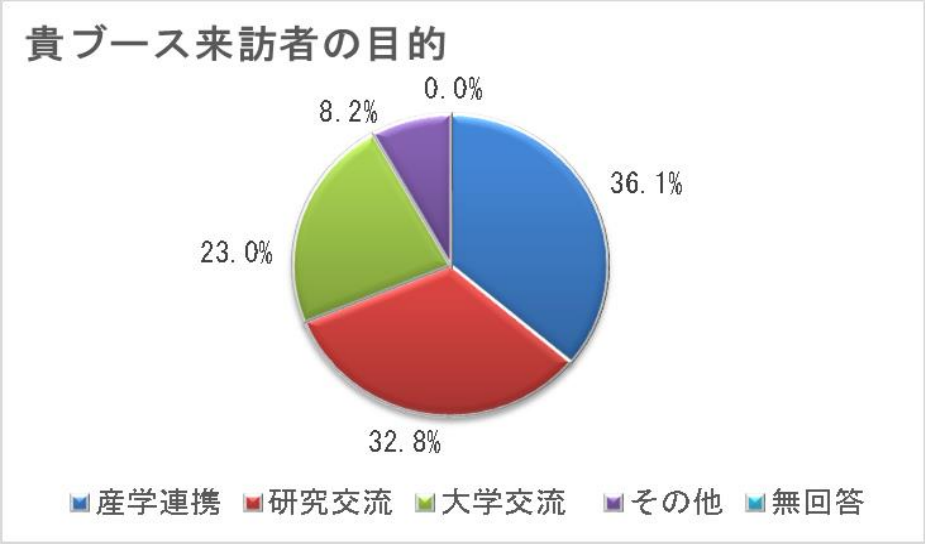
また、中国の出展者はブース出展だけではなく、積極的に日本の展示ブースを訪れ、将来の日中間の技術協力、共同研究について協議していた。

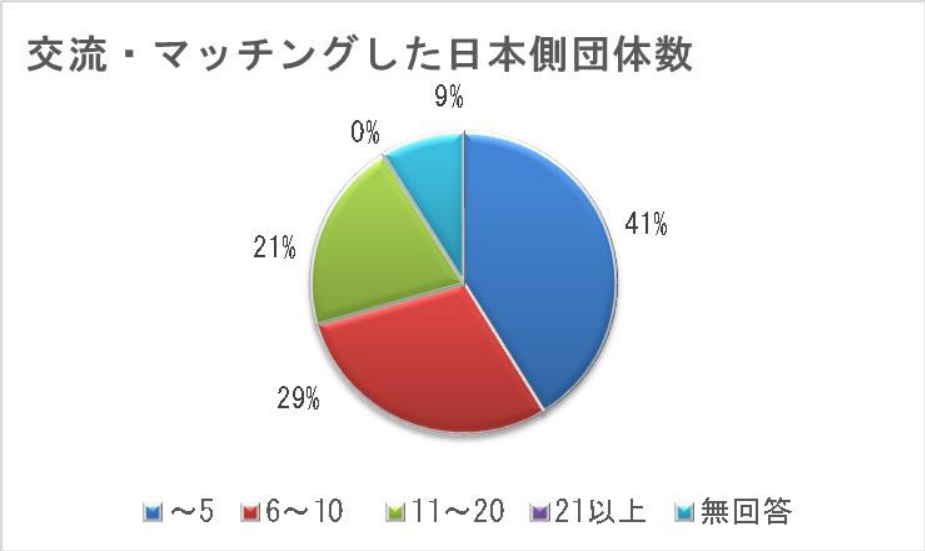
一方、日本の出展者との交流を更に促進するため、中国大学だけの展示エリアを設けず、日本の出展者と同じエリアで展示すべきとのリクエストがあった。将来、いかにして日中の出展者同士の交流を深めるかについては、一段の工夫が必要である。

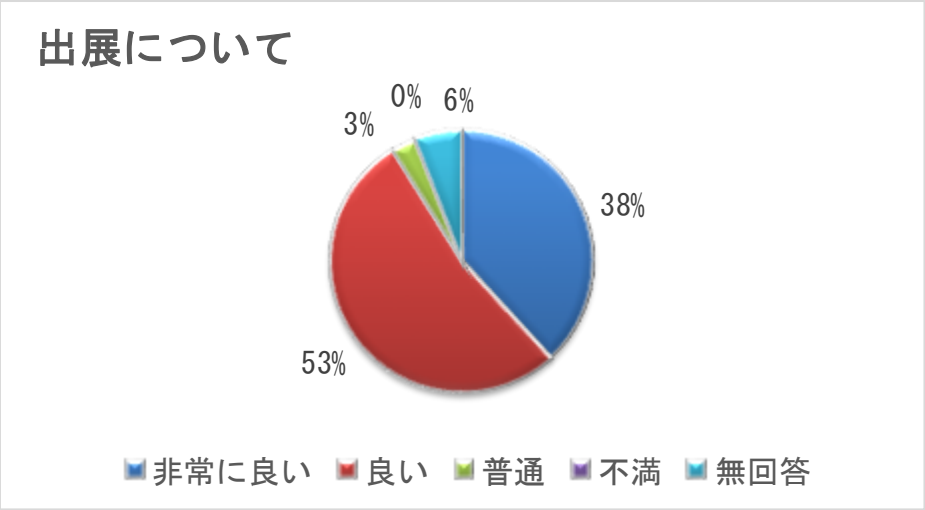
4. 日中大学フェア 2016　出展者アンケート集計

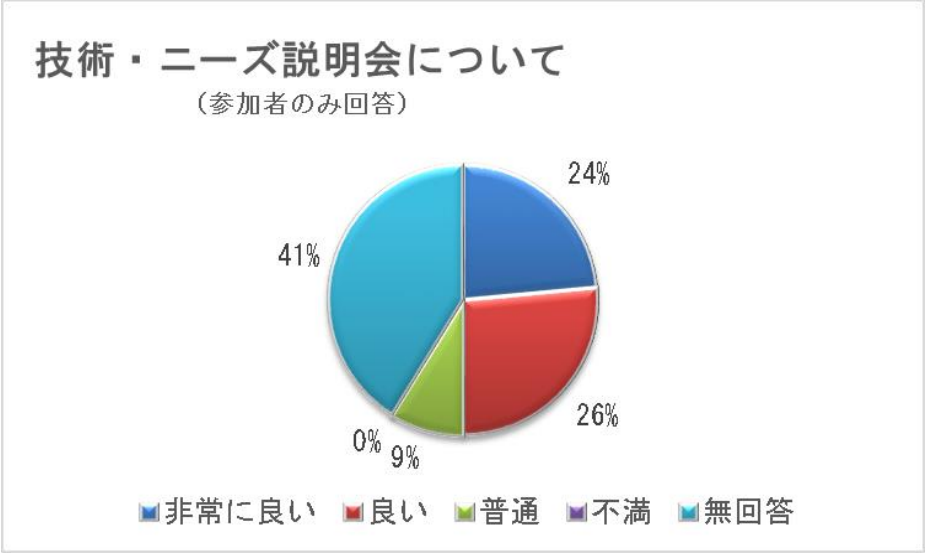


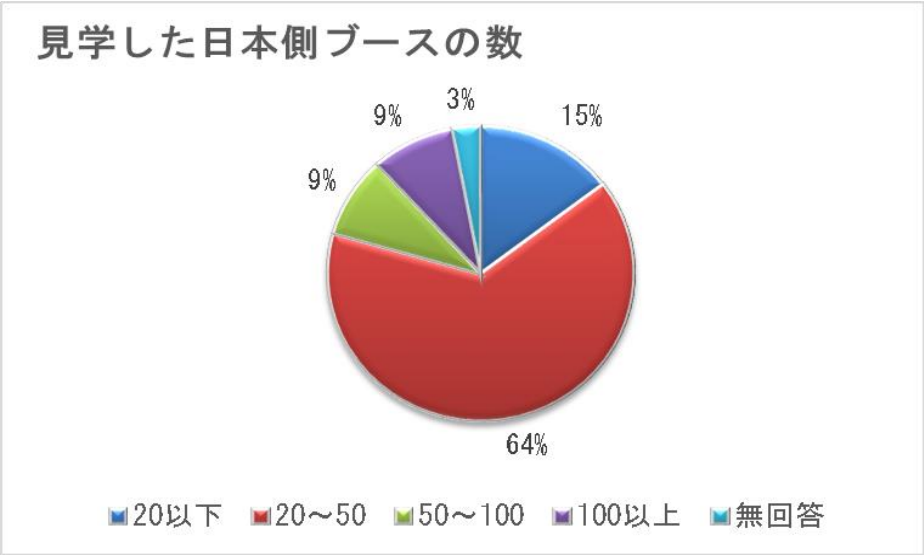


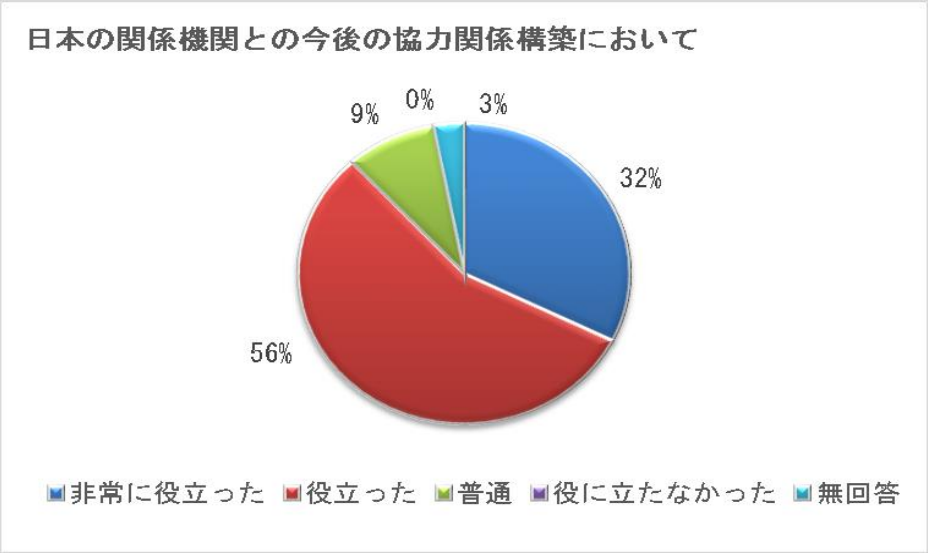


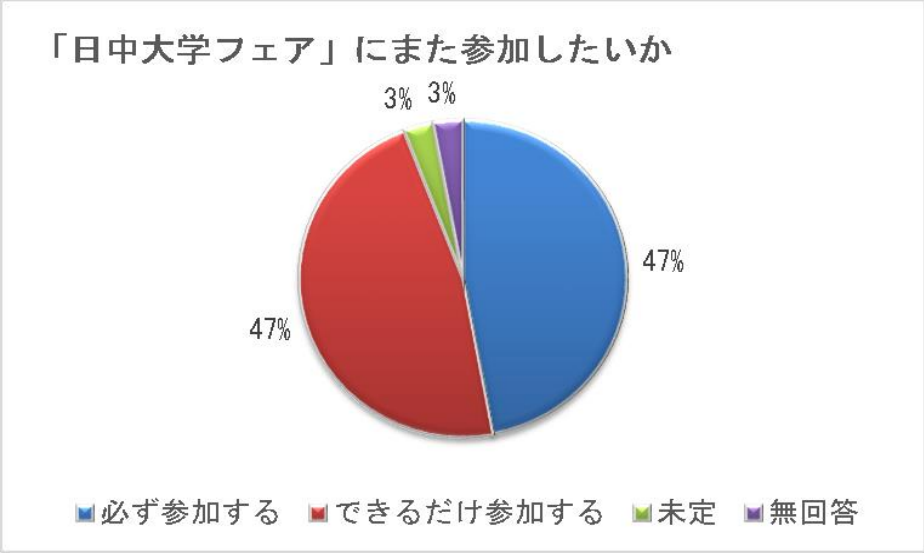

交流・マッチングした日本側団体数
9%
0%
41%
21%
29%
～5
6～10
11～20
21以上
無回答


出展について
0%
6%
3%
38%
53%
非常に良い
良い
普通
不満
無回答


技術・ニーズ説明会について
（参加者のみ回答）
24%
41%
26%
0%
9%
非常に良い
良い
普通
不満
無回答


見学した日本側ブースの数
3%
9%
15%
9%
64%
20以下
20～50
50～100
100以上
無回答


日本の関係機関との今後の協力関係構築において
9%
0%
3%
32%
56%
非常に役立った
役立った
普通
役に立たなかった
無回答


「日中大学フェア」にまた参加したいか
3%
3%
47%
47%
必ず参加する
できるだけ参加する
未定
無回答

今回のフェア参加の満足度評価の理由
主催者より、空港送迎・会場セッティング・ブース通訳手配・マッチングの機会等につき様々なご配慮をいただきました。今回のフェアでの多くの収穫を得ることが出来、また他機関のブースを回って交流することが出来て、非常に満足です。
通訳の手配等各方面への細かい配慮やスタッフの皆様の勤勉さに感服いたしました。出展機関も多く内容も豊富で、様々な技術・学術分野の新しい成果の展示もあり、多くの収穫がありました。
今回のフェアで日本のリハビリ分野の新技術に触れることが出来ました。日中産学連携に非常に有益なイベントだと思います。
今回のフェアは日中大学産学連携に対して非常に有益なものだったと思います。
国内外の大学や研究所等の研究成果が一同に介し、たくさんの交流の機会を持つことが出来ました。科研プログラムマッチングのプラットフォームとして非常に良いと思います。
当校は2年連続で日中大学フェアに参加しており、こちらでの交流は我々の研究にプラスになっております。日本の大学の研究成果と産学連携の新しい方法を学ぶことが出来る本フェアは、日中双方に交流の機会とプラットフォームを提供するものだと思います。
来日前より情報提供等の連絡、また非常に詳細な資料も準備していただきました。ホテルや会場準備、通訳の手配等も周到で、心より感謝申し上げます。
スタッフの皆様がとても細やかで、アレンジが行き届いていました。各大学や研究機関の出展内容も非常にイノベーティブで、実用的な価値も高いと思いました。

交流・マッチングした日本側団体名称
■企業 DIC株式会社、武田薬品工業株式会社、三菱、富士通株式会社、CANON、ヤマナカセラダイン株式会社、三菱東京UFJ銀行、株式会社神戸製鋼所、堀内電機製作所、住友化学株式会社、アドバンス理工株式会社、東京エレクトロン株式会社、日立化成株式会社、株式会社京三製作所、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社東芝、REAL Design
■大学 秋田県立大学、東海大学、北海道大学、埼玉大学、立命館大学、筑波大学、横浜国立大学、岩手大学、岐阜大学、帝京大学、中部大学
■マスコミ 内外多文化福祉新聞、大分合同新聞社、全国地方新聞社連合会
■その他 全日本中国留学人員創新創業協会、三好内外国特許事務所

日本側団体との交流内容について
出展した機器の性能・価格・日本での販売予定等
技術交流、協力について
高齢者医療・リハビリテーション施設について
製薬会社や大学との共同研究
カーボンファイバー複合材料について

双方の主要業務についての理解、将来の協力体制構築について
3D 測量と識別研究について、スポンジ状グラフェンによる除染について
知的財産権保護についての協力、研究人員の相互交流、材料調合エンジニアリングフロー及び設備について
鉄道信号、安全と制御、長大橋梁ロングレールと路盤の協調性研究の技術協力と特許の共同申請、大学間協力等
院生の共同育成について

日本側団体と協力関係を構築する意向が確認された場合、その名称
北海道大学、武田薬品工業株式会社、ヤマナカセラダイン株式会社、堀内電機製作所、住友化学株式会社、東海大学、帝京大学

ブース出展について
各方面にて合理的に手配していただき、我々出展者への支援も充分でした。
国際的な視野を広げることが出来、日本の産業界との交流の機会が増えました。
日本側とあまり交流を持てなかったです。
ブースの配置、また説明会もとても良かったです。しかし日本側ブースには中国語通訳がおらず、また英語の資料も無いため困りました。
英語での交流が必要だと感じました。

「技術・ニーズ説明会」について
良かった点：設備・通訳も大変素晴らしかったです。スケジューリングもきちんとされていて、思っていた通りに発表できました。 気になった点：聴衆が少ないと感じました。時間帯と関係があるかもしれません。
双方向の交流があまり出来ませんでした
時間が短かったです。パワーポイントも日本語しかなく、翻訳にもズレがありました。
実際に製品を見せるなど、デモンストレーションを行えばもっと良いのでは。

日中大学フェア 2016 全般についての意見
来場者はそれほど多くないと感じました。フェアの影響力を高めるため更なる努力が必要だと思います。日中合同の説明会を開催しては如何でしょうか。
日本の大学や企業・科学館等の見学をスケジュールに入れてもらえればと思います。
1, 中国語もしくは英語の資料を増やしてほしいです（日本の大学ブース） 2, 日本の大学と同じエリアで出展したいです。
日本の大学との交流があまり出来なかったです。
内容も形式もとても良いと思います。ぜひ今後も続けていただきたいです。
当イベントは、日中両国の大学や企業の革新力、技術転化及び産業化能力を高めることが出来、科学と産業技術の共同発展を促進するものだと思います。
分野を細分化してほしいです。また、インターネットを利用して事前の宣伝をもっと行ううと良いと思います。